

東南アジア研究センター 1966年度第3・四半期報告

1966年度第3・四半期、10月から12月にいたる3カ月間の東南アジア研究センターの活動状況を報告する。

社会科学部門の**現地調査研究**としては、石井米雄助教授（東南ア研）が、ひきつづき**バンコク連絡事務所**の所長をつとめるかたわら、タイ国近代史の研究を進めている。同助教授は11月には、ビルマ調査可能性の打診のためラングーンに出張、また12月には事務連絡のため一時帰国した。8月いらいイギリス・アメリカで文献調査をすすめていた飯島茂助手（東南ア研）は、2カ年にわたるカレン族現地調査を完了して、11月帰国した。

自然科学部門では、福井捷朗大学院学生（農・植物栄養学）と高谷好一研究生（工・地質学）が、ひきつづきタイで現地定着調査を行なっている。医学関係として、9月いらいタイ・インド・セイロンで慢性弗素中毒症の現地調査を行なっていた小野尊睦助教授・佐藤匠・天野義彦助手（医）は10月に帰国した。加藤清助教授と笠原嘉講師（医）は、11～12月、タイで精神障害者の調査をすすめ、佐川弥之助講師は、12月、タイで結核外科の現状調査に従事。また、寺松孝助教授（結研）はタイ・ブリラム県医療協力のため、12月に現地に赴く。薬学研究として、木島正夫教授（薬）は、タイ・マレーシア・シンガポールの生薬事情を10～11月に調査した。地学関係では、一昨年度にひきつづき、11月に森山徐一郎教授（工）がマラヤの製錬の現地調査をすすめた。さらに農学関係では、10～11月、赤井重恭教授（農）が、昨年度につづき、タイ・マレーシアの作物病虫害の調査、貴島恒夫教授（木研）がタイ・マレーシア・シンガポール・ブルネイで南方材の予備調査を行なった。熱帯水田土壌研究をすすめている川口桂三郎教授は、久馬一剛助手（農）とともに、本年度の調査はパキスタン・ビルマ・カンボジアを対象として、12月現地に出発した。

交換計画では、12月にビルマ問題の権威である F. Trager 教授（ニューヨーク大学）を招待、研究会をもち、また、マラヤ大学への日本研究講座寄贈にかんして、同大学 Ungku Aziz 経済学部長の来訪をみた。10月1～2日、わが国ではじめての総合的な東南アジア医学シンポジウムを厚生省・海外技術協力事業団と共催、同月29～30日のアジア政経学会第20回大会の当番校となった。

出版計画として、『東南アジア研究』第4巻第2号のほか、昨年9月に催された東南アジア水資源にかんするシンポジウムのプロシーディング *Water Resource Utilization in South-east Asia*, Symposium Series No. 3 の刊行をみた。

諸計画がおよそ予定どおり進行されつつあると思う。

1966年12月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍